第34号　昭和三五年四月廿日第三種郵便物認可　戦　旗　毎週火曜日発行　1960年10月18日

戦旗

一九六〇年十月十八日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集発行人　鈴木　深
一部　拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

白色テロの本質はなにか

右翼は資本の手先

「暴力反対」は小ブルの思想だ

浅沼暗殺の復讐を選挙に解消するな!!

社会党の浅沼委員長が刺殺された。都選挙管理委員会主催の三党首立会演説会の壇上で演説中、千人の大量の目の前で、テレビ放送のスクリーンの中で、二百人以上の制・私服警官の警備の前で、ただ一突に殺された。あらゆる職場で、地域で、憤激がまきおこっている。ただちにその夜から連日デモが続いている。労働者人民は、このテロルをどう理解し、その怒りをだれに、どうぶつけるべきなのか。

（一）

「白色テロ」—右翼の政治的暗殺、これは一体なにであるか。

多くの「識者」といわれる人々や新聞論調は、これを「暴力」として非難し、「民主々義に反する、野バンな行為」として、古い日本の、悪い伝統的なものの復活だと怒り、「暴力根絶」「民主々義の確立」を強調している。熱意の差はあれ政府・自民党から、進歩的保守的文化人、社会党、共産党に至るまで、これは変りはない。

だが、テロは「野バン」な「暴力」だから悪いのだろうか。

支配者が、支配を維持するため自分につごうの悪いものをやつつけることは、「政治」の常である。「白色テロ」は、まさに「支配者」によつて、タテつくものを弾圧する最も「原始的」な方法なのだ。

だが、それは「原始的」でない方法—政府が反対党をやつつけるために、法律にもとづいてその党首や党員を逮捕し、死刑にすることと、どこがちがうのだろうか。

戦前、治安維持法は社会主義者をことごとく獄にぶちこみ殺し、追放した。その治安維持法に反対して戦つた労農党代議士山本宣治は演説の前夜テロに殺された。

浅沼委員長はテロに倒れた。三池の労仂者久保清さんも右翼に殺され河上代議士も刺された。樺美智子同志は警官に殺された。田原製作所の塙さんも。六・一五に多くの仲間が傷ついたこの間に、どんなちがいがあるのだろうか。

資本家階級が、自分達の支配を保つために、労働者人民の反抗をたたきつぶす方法はいろいろある。テロも警官隊も、転制も、思想宣伝も……

テロはその中で最も原始的であるにすぎない。だから、「暴力根絶」とか「民主々義と相入れない」というだけでは、問題は解決しないのだ。資本家階級は必要な時には再び野蛮人に帰るだろう。労仂者人民が、階級なき社会、テロにまで至らざるを得ない支配を必要としない社会をかちとることなしに、「暴力」だけをなくすことは、どんなに民主々義が強調されても出来ないことを浅沼暗殺は教えているのだ。

（二）

三万人の労働者は、悲報の三時間後に早くも警視庁、首相官邸にデモをかけた。「警視総監をクビにせよ」「池田は責任をとつてやめろ」これがスローガンだつた。

政府は、翌日山崎国家公安委員長をやめさせ、警備責任者もやめるよう意志表示をした。（警察が責任をとらねば、全責任を自民党がかぶることになるから、と彼等はいつた）だが警察当局—国家公安委員会は柏村警察庁長官も小倉警視総監もやめる必要はない、「警備に手落ちはなかつた」とケツをまくつた。政府は、山崎をクビにしたからもう責任は終りました、とすましている。

労働者は完全にナメられているのだ。野党第一党々首として、労仂者の最大の支持を得ていたヌマさんが、労仂大衆を代表して池田や西尾と渡り合う立会演説の壇上で殺されたのに、彼等は「手落ちはない」というのだ。

なぜここまでナメられねばならぬのか。彼等は、抗議デモなど数日で終つてしまうことを知つているからだ。選挙が始まれば、すべて力が選挙運動に注がれて彼等は痛くもかゆくもなくなることを、知つているからだ。これまで安保の高揚の後でさえ、大量処分に抗議一つしなかつた指導部とそれに従つている「羊のようにおとなしい」日本労働者階級の現状を見越して、平然と居直つたのだ。彼等の見通しの正しさは、すでに十三日夜のデモで立証された。新橋駅付近につくられた警察のバリケードを、全学連の部隊がぶち破ると労仂者の大部隊がそれに続いて進んだ。その時、デモを警察が止めようと思つていた所で止めたのは、委員長を殺された社会党、総評だつた。そして大衆はそれにやすやすと従つてしまつたのだ。

全学連だけを弾圧し（十五日、警官隊八千人を五百の学生にさしむけ、指導者五人を逮捕した。「警備に手落ちはなかつた！」）あとは自然につぶれるのを待つたのだ。

これはどナメられた労仂者、それが白色テロをのさばらせている一因だ。

もう一歩進んで考えてみよう。「小倉警視総監らをクビに」すれば、それだけでよいのか。これは労仂者の勝利である。だがその後に、もつと有能な男が警視総監になつたら。

資本家階級の代弁者たち——首相、大臣、警察の長官たちは、一体本当に「責任をとる」ものなのだろうか。政府や警察が、悪人をやつつけ、労仂者とその代表を守るべきだ、というのは、われわれの希望ではあつても、政府や警察の実際の姿ではない。彼等は、浅沼がテロで死ねば「その手段」に顔はしかめても結果には満足しているのだ。「岸安保の斗いの高揚で、「悪い」とすべてを岸におしかぶせ、岸をやめさせることによつて斗争の盛上りを一気にしずめたやり方、その後で池田が平然と現れたのと同じだ。これと斗うためには、労仂者人民が、その怒りを、こうしたごまかしにのせられることなく白色テロ、警察、政府というすべての人民に敵対する機構そのものをぶちこわし、その元締めの資本家階級を倒すことに向ける以外にないのだ。

（三）

資本家たちは、自分達の階級支配を保つために政府警察といつた支配体制をつくる一方、最も手つとりばやいものとして、「私兵」を養つている。暴力団は何で食つているか。「小もの」はパチンコの景品買いやインチキトバクや恐カツ、あるいは麻薬などもあるが最大のものは、会社おどし債権取立てなどであることは公然たる事実である。関東軍のようにこの「私兵」も政治家や資本家に養われ時にはそれをおどしたり、岸信介を刺したようにかみついたりしながら、「共存共栄」を続けている。ストライキの時、まず労仂者のピケを破るのに動員されるのは、中小企業のストから三池争議まで、何ら変るところはない。（その時警官が労働者を一緒になつて弾圧することも）資本家は、暴力団に金を与え、武器を与え（親の形見でさえ取上げられる拳銃を、彼等が公然と売買しているのは映画だけではない）必要な時にそなえているのだ。三池斗争に全国の右翼が集つたことを見よ。これは保守党政治家に結びつき、資本家政府の別動家を形づくる。「院外団」として乱斗国会に現れ社会党議員を痛めつけたり大臣が親分に花輪を贈るなどは当り前で、暴力団の親分自身が、地方のボスとして市会議員や県会議員になつていることはめずらしくない。

こうした広い地盤のうえに、資本家どもは毎日毎日「アカは敵だ」「アカは国をほろぼす」式の思想を、ふんだんにふりまいている。安保・三池の大斗争の中でそれはきわめて多くの金とイデオローグを使つて行われた。

資本家の私兵として、金で養つたものに、思想をふきこみ、強力な「右翼」に仕立てるのを仕事とする各種右翼団体と、それを激励し援助し、まとめる自民党政治家が現実に存在しているのだ。

階級斗争が激化するにつれて、彼等は意識的に活動を強化し、戦線を整備する「暴力追放」をスローガンにした岸内閣が生れた五十八年に、岡崎英城ら自民党代議士のキモ入りで「新日本協議会」がつくられ、暴力団の政治結社が生れ、菊地義郎という代議士が「右翼も政治に関心を持ちだしたのは喜ばしい」とアジつている。勤評斗争・三池・安保の中で「目ざましい」右翼の活躍は偶然ではないのだ。同族のよしみと、資本家政治の強い圧力で、その地下網は警察が調べようともしないので、明るみには出ないが、右翼戦線の再編と、特に戦後派右翼—行動派右翼とよばれる部分がこの事件をきつかけに動き出しているといわれる。

われわれは、日本労働者階級の前に公然と姿をあらわした、組織された私兵、白色テロルに対する斗争を準備しなければならないのだ。

これが、一方においては民社・全労を軸とする思想的組織的攻撃と対極をなす資本家階級の戦術であることを見抜かねばならない。「これからは経営者の時代だ」と資本家どもがうそぶき、日本産業全体の大基漠構造改革がすべてを労仂者の犠牲のうえにおしすすめられつつある。いたる所で火をふくであろう労働者階級の抵抗に、総選挙後の池田内閣が強力な攻撃を用意しているのと呼応して、白色テロルは独自に牙をみがいているのだ。しかも彼等は自分の頭と組織と「武器」をもつて、資本家どもの直接支配をはなれて襲いかかつてくる。経団連の石坂をはじめ、資本家どもは異口同音に言つた。「テロは悪い。だが安保や三池の様子を見れば、ああなるのも当然だ。」

右翼の斗士たちは、この資本家どもからのふるまい酒に酔い最初の勝利を祝つているだろう。

（四）

資本家どもと抜け目のない政治家達は、早速この事件を利用し、新らしい攻撃を開始した。多くの「良識ある」人々が、善意から「暴力は絶対いけない」「取締りが手ぬるい」というのを利用して、彼等は「戦後の教育が悪いからこういうバカな少年が出た」「安保や三池で暴力不感症になつたからだ」「左右の暴力をとりしまる」と「暴力排除」の思想を大々的に宣伝している。いうまでもなく、その狙いは安保や三池で示した労働者人民の「斗争」を「暴力」だから止めさせようとするものだ。彼等は労働者人民を、テロでおどさない代りに、おとなしい小羊にしてしまおうとしているのだ。その方がどんなにトクか！さらに悪ラツな彼らは「社会党や総評の反警察的態度が取締りを困難にしている。こんなことがおこるから、「警職法改正が必要だつたのだ」と宣伝し、これを契機に治安体制を強化しようとしている。

だが、労働者階級の指導部は、これを見抜き、暴露しているだろうか。否！自民党と一緒になつて（おおテロの元締めと一緒になつて）「暴力根絶決議」をつくろうとしている。これではこちらから手をしばることだ。資本家どもが喜ぶように、「暴力追放」の音頭をとつているのは社会党や共産党ではないか！さらに、テロで委員長を殺されたのに「選挙でカタキをうつ」方針だ。選挙でカタキがうてるか。否、絶対に否だ。特に今度の選挙は安保、三池の斗いを、おしつぶし、せつかく斗い抜いて来た力を、そつくり池田にさし上げてしまつた結果の選挙であり、池田内閣はすべての問題が「選挙で解決」するようにされればされるほど、有利な立場に立つのだ。

労働者が資本家と斗う道は選挙ではない。労働者が団結し、その力をストライキやデモの大衆斗争で、資本家のいう「左の暴力」「集団暴力」で斗うことだけが勝利を保障する。選挙はその力をバラバラにし、労働者から団結を奪い、階級性を忘れさせる資本家の魔術なのだ。

今、一人一人の労働者人民の胸にもえる怒りを、直接行動で、本当の敵である資本家階級にたたきつけ階級斗争で倒れた人を、労働者人民はどうしたら「弔う」ことが出来るだろうウラミをのんで散つた人は何も云わない以上、われわれはただ「復讐」によつてしか応えることは出来ないのだ。

「復讐」これが労働者階級の弔いである。「復讐」それは資本家を打倒し、しいたげられ、しぼりとられ、殺されて来た労働者階級が権力をとり新らしい社会をつくることなのだ。

「戦旗」固定購読
お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
振替番号東京一二一〇四番
定価　一部　十円
月　四〇円　半年　二四〇円
送料五円　送料三十円

選挙で斗争をずらすな　月給制で本務化をごまかす民同

全逓非常勤斗争

全逓非常勤斗争は、下部大衆の斗争意欲と、その表現である大量の物だめが各所で行われたにもかかわらず、選挙を口実に、中斗により決定的な裏切りが行われようとしている。

先の中央委員会で決定された方針は、選挙と非常勤斗争と二つを斗いぬくのではどちらも力が集中できないから、選挙は選挙一本で斗いぬき、そしてその後に年末から来春にかけて非常勤斗争を斗いぬく、という方針を決定した。しかも集中攻撃をうけぬよう、すでに斗われている物だめを分散的に行い、それも二日以上ためないという指導つきで！九月末、今度こそ非常勤務者の本務化で全逓合理化攻勢を粉砕しようと、集配を中心に、社会問題となるまで斗いぬいて来た下部に、先には三六を結べという指令を出して、それまでせつかくためた物の山をくずしてしまつた中斗は、力でもつて斗いぬく姿勢をまつたくもつていないことを再び示したのだ。そのくせ、一切の責任を下部に転化している。選挙中、選挙一本で斗うということで現在の非常勤斗争は大したことはないといわれないため下部は一生懸命やれ！と。せつかくためた物を選挙に不利になるといつてくずし、郵政が頭にくるころになると選挙でもつて中止する。年末斗争と結合して斗うふりをみせながら、大斗争になるのをおそれて、斗争は長い、年末だけで終らせないで三月まで斗う、といつて年末の一番斗争の条件のあるときをそらす。

指令通り、全力をあげて斗つて来た支部の活動家は何のために物をためたのかよくわからぬままに方向を失つている現状だ。

郵政も非常勤をそのままにしておけず、一応作業員等の名目で何千人かは常勤に[illegible]

全逓中斗はすでに十二回定期大会で若干の攻撃を下部からうけたときに明らかにしたように、専門委員会で、この月給制で手をうつことをにおわせているのだが、今すぐやると斗つている下部から反発がでる、だから大斗争にならぬよう長期にひきのばし、斗いつかれたときに妥協でごまかそうというのだ。

彼らは非常勤の問題を全体の合理化のなかで位置づけていない。中斗は非常勤の実質上の制度化による裏切りによつて全逓の中核、郵外労働者のエネルギーをひやし、資本への反抗をおしとどめようとしているのだ。こうした態度では絶対にかちぬけない。年末繁忙のなかで真正面からの対決をつくり出すこと、このことこそがカギなのだ！

学生同盟員の任務とは何か

都学連大会分裂と我々の原則的態度

共産主義者同盟「戦旗」派学対部

全国の学生同盟員諸君、並びに活動的学生諸君！共産主義者同盟「戦旗」派学対部は、大会以来うち続き拡大しつつある同盟学生細胞内部の混乱（特に東京において極点に達している）そしてその必然的帰結としての学生運動の混乱を打破し、学生細胞内部の論争に明確な赤い糸を通し、大衆運動としての学生運動の発展を保証するために、左の点を諸君によびかけるものである。

小児病的病根をたちきり　プロレタリア党建設の道をつき進め!!

五同大会以後、同盟労仂者細胞の内部には殆ど重大な影響を及ぼさなかつたが特に東京の学生を中心に、同盟創立が主として日共内学生フラクションの発展としてなされたという限定と創立後スターリニズムからの断絶をおし進め、組織的実践的にも学生党的状況からの脱皮とプロレタリア党への発展をかちとつていく方向が明確にされず、その限定を固定化し強化してきたことは、すでに戦旗前号巻頭のアッピールにもあきらかである。

情勢分析の客観主義と戦術決定における主観主義、大衆運動への埋設（大衆追随主義、同盟の大衆団体化＝行動左翼の結集体、素朴実践主義）、組織論におけるスターリニズムへの傾斜は、全同盟的にも、スターリニズムから断絶し、プロレタリア党として自らを形成していく障害物として見出されるのであるが、とりわけ首都の学生細胞の中に端的な形であらわれていたのである。

五同大会以後の同盟内部斗争の過程の中で、同盟の体内に深く侵入していた小ブル的、スターリニズム的一切をえぐりだし、プロレタリア党への転換をかちとつていくという方向は、今や労仂者細胞の内部では勿論のこと、特に地方の学生細胞の中では支配的な力をもつてきている。しかし、その過程にあつて全同盟の脱皮をおし止め、乃至は病根の拡大再生産を意図する部分として結集して来ている「革命の通達」派なる一派は、かの有名な、小児病的主観主義の戯画をもつて登場した。かれらこそ同盟の一切の病根を拡大し体現したものとしてあらわれその偽左翼的言辞は、急進主義的指導により自らの成長を阻まれ、行動左翼として止まつているかなりの中堅活動家を捉えている。

一方、五同大会以来一貫して動揺を続けている「プロ通派」は、同盟の解体と混乱を思想的根源にまでさかのぼつて検討する努力を放棄し同盟の革命的伝統をひきつぐ唯一の分派という空文句をもつて登場することによつて、同盟のプロレタリア党への脱皮に対して反動的な役割を果している。

かれらは、旧来の同盟がそうであつたように、かろうじて、相対的に現実的な学生運動の当面の方針の提起によつてわずかに積極的な意味をもつにとどまり、かれらにあつては同盟は、依然として、学生行動左翼団体として止まることだけが保証されている。かくて大言壮語をふりまきながら素朴実践主義にかりたてることだけでは、首都の学生中堅活動家からも見放されつつある実情である。

しかも両派の抗争は主として東京にだけ限られているが、その両者が共々、創立以来の同盟の深い思想的根源にまでわたる検討を通じて、日本と世界のプロレタリアートの要請に応え、学生大衆団体的現状を脱しプロレタリア党建設の立脚点を明らかにすることに決定的な問題があるのだという点すら明らかにしえず、小児病的空論と実践にあけくれしているという点では同断である。

しかもかれらの革命の戯画と主観主義的に学生をかりたてる学生運動の実践的展開は、原水協脱退問題、八月下旬の三池斗争方針、更に九・十月の斗争方針をめぐつて学生運動自体を幾度もの危機においやつている。

かつて、一度全学連を占拠した革共同関西派は、学生運動の全く誤つた理解から、主観主義的方針をおしつけ学生大衆を把握しえず半年にして学生運動から放逐された。

特に「革命の通達」派の場合は、この危険にみちみち、池田体制打破から革命の展望を見出そうとするかれらの方針は、例えば、浅沼刺殺に抗議し爆発しかけた早大の学生運動の展開に決定的水をかけたものであつた。

「プロ通」派は、学生運動技術者を揃えているが故に、「革命の通達」に比べ言葉の上では若干現実的である。

かれらの場合、例によつて大言壮語をふりまきながら、自派の固めの絶好の場として学生運動を利用しようとする。

この点では「プロ通」派は同断である。かれらは学生のみにしか基盤をもち得ないが故に　そしてまたかれらは、プロレタリア党の組織と理論の問題をせいぜい学生活動家組織（大衆的なだ！）の組織と理論の問題としてしか考えないが故に原則的な細胞討議として、大衆斗争の展開を相対的に独自に展開しえず、すべてを大衆団体にもちこみ、すべてを大衆斗争で決着させようとするのだ。勿論大衆斗争とは、学生運動の意味だ。

当然両者に共通にプロレタリア党建設の独自の問題、又プロレタリア党としてのプロレタリア階級に示すべき当面の方針は全然問題にならない。後者についてはせいぜい学生運動の方針を労仂者階級にもおしつけるのがおちである。

原則的論争を展開し　学生細胞を再建せよ！

現在の学生運動内部にあらわれている混乱も、結局同盟学生細胞内部における前述のような理論的実践的奇形とセクト主義にねざしている以上、同盟学生細胞の中で、プロレタリア党建設の立脚点に立つた原則的な論争を組織しなければならない。

都学連大会における大混乱は全てを大衆団体の中での直接の抗争として持出さざるを云ない彼等の思想によつて、必然的に現出された。

あの混乱が、如何ばかり大きな損害を、日本のスターリン主義から断絶したプロレタリア運動に及ぼしていることか。

安保斗争の過程の中で同盟の指導下にある学生運動は、相対的に正しい方針の下に、学生大衆を戦斗的斗争に結集することに成功し、労仂者階級の中に大きな信頼を獲得した。

たしかに全学連の斗争を通じて、労仂者階級の先進的部分に日共に対する訣別の乃至は疑惑の最大の契機が与えられてきたこともたしかである。

しかし、都学連大会の内紛と学生運動の危機は、労仂者階級の先進的部分に大きな失望を与え、スターリニストの策動に対する絶好の機会を与え更に又、全学連の活動家を支える、学生活動家諸君に大きな混乱を与えたのである。

このような状況の中で、すでに部分的に活動して来た同盟「戦旗」派学対部は、戦旗前号にものべたように、小ブル的、反動的（プロレタリア党への前進にとつて）形骸を依然として保持し学生細胞におけるプロレタリア党への脱皮の作業を妨害し続け、あまつさえ、学生運動を危機におとし入れている「革命の通達」派と「プロ通」派との断乎たる斗争を学生諸君によびかける。

同盟の奇形的発展が、学生細胞を実質的には、大衆的な行動左翼団体の位置に転落させるという犠牲の上に築きあげられ、そのしわよせが特に東京の学生細胞に集中し、それを基盤にして、小児病的革命の戯画が、実践万能論が横行している中で、今こそ同盟の根本的な思想そのものにさかのぼり、プロレタリア階級と革命そしてその媒介としてのプロレタリア党建設の問題をあきらかにする原則的な討議、すでに同盟労働者細胞の中で、地方のそして東京のいくつかの学生細胞の中で始つている論争を全面的に開始する必要がある。

学生運動内部における前衛党の活動は、決して大衆斗争にあけくれる大衆活動家、学生運動の技術者をうみだし、学生運動の展開を自己目的にする（如何にそうでないかのような修飾をつけようとも）ものであつてはならない。

同盟が責任をもつ唯一の大衆組織として、更に又、安保をはじめとする戦斗的斗争において労働者階級に大きな感銘を与えてきた全学連の学生運動を、大衆斗争として労働者階級の斗争に結合させながらも、その過程で、終生を労働者階級の解放のため、革命のためささげる共産主義者をうみだしていかなければならない。

左翼学生運動の過程で、自らを鍛えあげながら、一人一人が単なる行動機械ではなくて、マルクス主義により武装され、職業革命家として、イデオローグとして、更には基幹産業の中に潜入し、その奥深く巨大な細胞をつくり上げていく尖兵として新たな配置についていく予備過程として捉えねばならない。

単に学生運動を左翼的にやるか否かは、勿論前衛党員として必要条件ではあるがそれだけでは決定的に不充分である。それだけでは、社学同と全く区別がつかないではないか。

学生運動の中から階級斗争に参加していくという、これまでの同盟のあり方の倒錯は、大会において労働者同盟員から鋭く指摘されたところではなかつたか。

このような倒錯の結果、たしかに同盟学生細胞は、前衛組織としての細胞の体を殆ど例外なくなしていなかつたことはたしかである学生細胞に端的な同盟のプロレタリア党とは縁遠い情況に対して、学生細胞の同志諸君が原則的な視点にたち、同盟の思想的根源にまで至る病源をかしやくなくえぐり出すのは、たしかに痛苦にみちたものにちがいない。しかも「プロ通」派、「革命の通達」派が問題を不明確にし逆行させている状況にあつては尚更である。しかし、このことをさけては、永久に学生左翼行動団体に終ることもたしかではないか。前号にでている「戦旗」派の立場にたち、今こそ、学生細胞内部からも小児病的空論主義者と、学生運動万能論者を放逐せねばならない。（すでに全国的にも東京をのぞく大多数の学生運動は「プロ通」「革命の通達」両派をはなれ、かなりが戦旗派に結集しつつある状況の中で、遅ればせながら東京の学生細胞内部においても戦旗派の活動が急ピッチに始められていることを付言しておく）

十・二八反池田斗争を戦斗的に斗い抜け!!

大衆斗争として学生運動を如何に展開するかについては、戦旗前々号に、プロレタリアートの当面の任務と共に簡潔にのべられている。

あらゆる政治勢力がブルジョア選挙の土俵にひきこまれている中で、学生の高度の政治性をもつてブルジョア支配の中で池田に対する斗いを展開していくこと、そして学生大衆をその政治目標の下に結集しながら、労働者階級の前に池田内閣の本質を暴露することでなければならない。

学生の場合、教育基本法を頂点とする一連の教育に対する攻撃が、日教組の低姿勢の中で、大々的にアドバルーンとして語られている中で、反動文教政策に対する暴露は、来るべき重要な斗争目標の宣伝の意味もふくめて大々的になされねばならない。

学生運動に対する全く誤つた理解から、前述の「革命の通達」派のそれのように、首都の大衆運動を妨害し、学生運動の危機の深刻化に貢献している部分があるが、この点については特に現在充分に注意せねばならない。安保斗争の時期のような安易なとりくみでは学生大衆の結集に失敗することは明らかである。十、十一月の学生運動が、その性格からして、かなりの程度の学生大衆を池田政府に対する斗いに結集し、労働者階級人民の前に池田の本質を暴露するカンパニヤ斗争としてくまれる以上、徒らに、合理化からときおこすという学生運動のイロハを忘れた愚をくり返さず周到な宣伝活動が準備されねばならない。

特に東京の学生運動は、主として同盟の混乱が、学生運動に直接に反映して、危機的状況にあるが、一〇・二八にむけ、浅沼暗殺、教育問題、等一切の契機を利用しながら、大衆斗争としての成功をめざさねばならない。そのことこそが、労働者階級の内部に形成されてきていた全学連に対する信頼を強固にすることになろう。

逆に、一〇・二八斗争が戦斗的大衆斗争として失敗し、少人数の而も分散した斗争に終始するならば、代々木派学生運動に絶好の門戸を開くであろう。

戦旗派学対部は、全学生細胞が、真に[illegible]的な論争を開始し、戦旗派の下に結集し、更に一〇・二八を戦斗的大衆斗争として成功させるため全力を傾注するようよびかける。

特報　…詳報次号…

一、早大第一文学部自治会全自連を脱退！委員選挙で代々木派惨敗！　十月十八日

一、長崎造船執行委選挙で左翼進出！日共からの被除名者二位で当選！　十月十八日

最前線

生きものは大事に……校務主任　悪いやつはやっちゃえ……小学生　—浅沼暗殺とM小学校—

★十月十三日、都内M小学校の朝の十分間の職員朝礼は二十分近くもオーバーしてしまつた。無関心をよそおうこともできない「浅沼刺殺事件」を「純心な」子供達にどのように話すか？まさにケンケンガクガク……☆甲論乙バクの末、五十に間近い校務主任先生が、めがねをふきふき立ち上つた。「やつぱりですねえ、子供の心を痛めるような言動はつつしむべきでして、この問題には深入りしないで、『生き物は大事にしよう』という話をしたらどうですか……」。時間も大分過ぎたからとそれでケリになつて先生方ぞろぞろ教室へ。☆T先生も、蜂の巣をつついたような四年生の自分の教室に入つた。「こう刺したら、こう倒れたんだ」と身ぶり手ぶりで、五十人の教室の中で二組も三組も実演入りでやられている。太つている子供が浅沼サンの役で、腕力の強い子供が山口の役だ。☆「あんたたち、最初にそのことをきいたとき、どうな風に感じた？」――『生き物は大事にしよう』なんていうことでは話にもならないことを痛感しながら、T先生はこうたずねた。「おれよう、テレビ見てたんだけどよう、ヤツタナつて思つたな」というのが間髪をおかずにはね返つてきた返事……☆「あさぬまさんをやるのはよくないけど、わるいやつだつたら、やつたほうがいい」「たんとうよりピストルのほうがかつこいいよな」☆「『暴力反対』なんていつて警職法のあと押しをするより、子供たちの声の方がホントだつて感じがした」とはT先生の感想だが、読者諸君はいかが？……

日刊　労働時事通信

労働者・学生活動家必読の
日刊労働時事問題専門誌

発行所　東京都千代田区神田美土代町十二（山京ビル）
電（二三一）二七二四番振替東京八五二八〇番

購読料　一ケ月二〇〇〇円　半年一〇〇〇〇円
（活動家〃額）